俺の彼女は存在しない。

ほろ@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺の彼女は存在しない。

【Ｎコード】
Ｎ７６８５Ｓ

【作者名】
ほろ@

【あらすじ】
満月の日にトラックに撥ねられ、呆気なく死んだはずの男子高校生一之瀬凛人は白石葵に助けてもらう。
そのお礼として、凛人は葵を同居することになるがやっぱり問題があったわけで……次第に綻びが見えてきて……？

人生の終わり

俺は満月の夜に死んだ。
もっと正確に言えば、四月二十八日の午後八時十三分に。
俺の人生の終わりは、呆気ないものだった。
信号無視をしてきたトラックに轢かれて死ぬ。たった、それだけのことだった。
まだやりたいことは、もちろんあった。そりゃもう、死ぬほどに。もう死んでしまっているのだけど。
未練がある状態で死んだ俺は、成仏できずに幽霊かなにかにでもなるのだろうか。
そんなことを薄くぼんやりしていく視界の中に、憎たらしいぐらいに綺麗な満月を入れながら思った。
きっとこれが、俺の心臓の最後の一仕事なのだろう。このまま少しずつ、ゆっくりと確実に死ぬのだろう。
……あれ？　いつまで仕事してんの？
「まさか、あなたがこんな死に方をするなんて……」
声がした。かわいいとか、そういう感じの声じゃなくてどっちかっていうと、綺麗って言うほうがしっくりくる、すごくいい声だった。
「私の人生設計が、大幅に変更することになりそうですね」
その言葉の後に俺の視界には、満月の代わりに憎たらしくない、見惚れてしまいそうな、女の子の顔が映った。
その子はとても、怒った顔をしていた。
え、なんだろう。この子、初対面だよね？
目は三角形が出来そうなほどに吊り上って、口はきつく結ばれて、体はわなわなと震えていた。そして、燃えるような瞳が、俺のことを刺していた。
この子、今凄い怒ってるけど……すごい可愛い。もったいないな。

笑顔だったら、もっと魅力的だろうに。
いきなり現れたこの子は何なんだとか、どうして怒ってるんだ、とか色々頭に浮かんできたけど、結局はただ見惚れてしまっていた。
こんな子を彼女にしてみたかったな。生きているうちに彼女居ない暦と年齢が等式で結べてしまう俺には、贅沢すぎるだろうけど。
でも、こんな子が彼女なら最高だろうなぁ……。
二人で手をつないで歩いたり、一緒に買い物したり……死んだ俺には、到底叶えられるわけがない妄想が、広がる。
死んだ俺……そう、俺は死んだはずだ。なのに、どうしてこんなに呑気に妄想とか出来ているんだろう。
目の前の子の迫力に呑まれたりとか、顔に見惚れたりして、一瞬忘れていたけど。
この状況は、どう考えてもおかしい。当たり前だけど。
こういう時は、最初から筋道立てて状況を整理するべきだ。
いやに冷静だけど、間違っちゃいないはず。
おかしいのは、死んだところから。この表現も相当おかしいとは思う。
俺は、ふざけたトラックに轢かれた。それが原因で、死んだ。
その次に、この少女が現れた。で、この少女に見惚れたり、この少女で妄想したりした。
俺の心臓の最後の一仕事にしては、あまりにも長すぎる時間が経過した。
つまり……俺は死んでなかったりするのだろうか。
そんなわけがない。今、俺の体は濡れている。雨なんか降ってないから、どう考えても俺の血だろう。　痛みは不思議とないけど、痛くなくても出血多量で死ぬには、十分すぎる量が出ているはずだ。
整理しても、分からない。さっぱりだ。俺の脳の許容限界を超えている。
「ふぅ……。今は考えても無駄ですよ。時が来れば説明します。だから、今は遠慮なく意識を失ってください」

自制するように一息ついた少女は、優しいのかどうだかわからない言葉を俺にくれた。
俺、声に出してたっけ、どうして考えていること分かったのかな。言葉の意味もどういうことか、分からない。けど、説明してくれるらしいから、まあいっか。
無意識に安心したのか、眠気に似ただるさが体に圧し掛かってきた。
自然と、瞼が閉じていく。
「あなたには、私を忘れないでいて欲しいです。けど、きっとそれは……」
そのか細い声は、春にしては冷たい風で、かき消されていった。

出会い

目が覚めるとベッドの上だった。
間接照明から控えめに照らされ、壁がゆらゆらと揺らめいているのが目に映る。
上半身を軽く起こして、一通り部屋を見渡す。
カーテンの隙間からは、薄く光が漏れて入ってきている。それと、いくつかの見たことのない、なんとなく高そうな家具がいくつか。
今は夜……だと思う。
立ち上がって、カーテンと窓を開ける。
開け放った窓から、少し冷たい空気が頬に触れる。
空には、綺麗な満月がひとつ。雲ひとつなく、ただ満月だけが浮かんでいた。
そのままぼんやりと、少しの間月を眺めていた。
思いきり息を吸って、静かに吐く。
目は完全に覚めた。けれど、
「ここ……どこだよ……」
全く記憶にない部屋。でも、割といい部屋で気に入ってしまった。
丁寧にベッドに寝かしておいてくれたんだし、拉致とか監禁だとかそういうことじゃない……はず。
「とりあえず、部屋から出よう」
一応夜らしいので、周りに気を遣って静かにドアを開く。
部屋を出た先には、広い廊下。
そこには、赤い絨毯が敷かれていて、外側には等間隔に並べられている窓があり、反対側にはまたなんとなく高そうな絵画が飾られていた。
「部屋から出たのはいいけど……何処に行こう」
自分では声を抑えたつもりだったが、響いてしまった気がする。
なんか、やたら気を遣ってしまう……。

悪いことじゃないしいいか、と一人で完結させて、適当に歩こうとしたら右のほうから、足音が聞こえてきた。
そのまま音の主を待っていると
「あら？」
メイドさんがいた。メイド服を着ているんだから間違いない。
おっとりとしているような、ほんわかしている雰囲気。出るところは出ていて、引っ込むところは引っ込んでいる、所謂モデル体系のメイドさん。
「お目覚めでしたか。立ち話もなんですし、あなたの部屋に入りましょうか」
「あ、はい。わかりました」
そのまま、俺より先にドアに近づいてドアを開けるメイドさん。
やっぱり、こういう気遣いとかは毎日主人にやっているんだろうか。
というかこのメイドさんは、俺のことを知っているみたいだ。
俺は、知らないけれどどこかで会ったことがあるのだろうか。
「さあ。どうぞ、お入りください」
メイドさん特有の丁寧な言葉遣いと、透き通るような穏やかな声に少し戸惑ってしまう。
ドアを開けてくれているメイドさんに軽く頭を下げてから、部屋に入る。流石に電気は自分で点けた。
「それでは、どうぞお先にお掛けになって下さい。私はお茶の準備をしてきますので」
そのままベッドに腰掛けて、お茶の支度をしにいったメイドさんを持った。
ほどなくして、部屋に戻ってきたメイドさんは、一式のものをお盆に載せていた。
「名乗るのが遅くなってしまいましたね。私の名前は、葉月栞と申します」
「どうも、俺は一之瀬凛人です」

恭しくお辞儀をされて一瞬戸惑ったけど、俺はこの人、葉月さんの主人でもないんだし、ということで同じように礼をした。
「あら、そんなに畏まらないで下さい。私は、一端の使用人にすぎませんから」
そう諭すように言いながら、いい香りのする紅茶を手渡される。
「あ、ありがとうございます。いや、でも……それより、色々と聞きたいことがあるんですけど、教えてもらえますかね？」
「ええ、私で答えられる範囲であれば」
何から聞けばいいだろう。多すぎて纏らない。
「……ここはどこですか？」
頭に浮かんだものから、順に聞いていこう。
「ここは、白石家のお屋敷です。もちろん、日本ですし、一之瀬さんが住んでいられた市域ですよ」
「白石、というとあの白石グループですか？」
「ええ、恐らく思い浮かべていらっしゃるもので、間違いありませんよ」
白石グループといえば、日本でも有数の大企業で、行っている事業をあげればキリがないとか。
「で、どうして俺がそんな白石家の屋敷に？」
「一之瀬さんは……そうですね。お嬢様と話し合ったほうが、今後のためにもいいかもしれません。ちょっと待っていてください」
「え、でも今は大分夜更けなんじゃ……」
「いえ、きっと……寝れていないでしょうし……少々お持ちを」
そう言ったきり、部屋から出て行ってしまった。
これまで、持っていただけの紅茶一口飲む。
「ふぅ……」
と溜息のような、息が漏れる。
紅茶からは、優しいような、落ち着く不思議な味がした。
人柄とか、味に反映するのだろうか。よくわからないけれど。
そんなことを考えていると、軽く扉が二回叩かれた。

「えーっと、どうぞ？」
俺の部屋でもないのに、どうぞ、でよかったんだろうか……。
「失礼します」
どこかで聞いた、綺麗ないい声。
部屋に入ってきたのは、流れるようなそれでいて艶のある、一目で分かるよく手入れされた髪の持ち主。白い、透き通るような綺麗な肌。間違いなく可愛い子。だけど、どこか疲れた様子だった。
「初めまして、白石葵です。この館の責任者を任されています」
礼儀正しく一礼。俺も、気付かないフリをして
「どうも、俺は一之瀬凛人です」
倣って一礼、ここで目が覚めてから、礼儀正しくなった気がする。
「敬語じゃなくて、構いませんよ。年もそんなに変わらないでしょうし」
「いや、そっちが敬語だったから、合わせたほうがいいかなって」
敬語を崩すのが早いのは、単純に慣れてないからで。喋れない訳じゃないけど、この人二人のモノに比べたら……うん。
「葉月さんから聞きました。いくつか、質問があるそうですね」
そう言ってから、俺に断りを入れて、向かい合うように白石は座った。
「うん。ここの家が大体どこにあるのかと、ここがどういう場所なのかは分かった。けど、もう少し聞きたいことがあってさ」
「どうしてここにいるのか、ですか？」
「そうそう、それも聞きたいことの一つ」
「あなたは、道端に倒れていたのですよ。それを、私が見掛けてここまで、つれてこさせていただきました」
「え、俺倒れてたの？」
思わず素っ頓狂な声を上げて聞き返してしまう。
「ええ、そうです。その様子ですと、覚えていらっしゃらないんですね？」
……まったく記憶にない。どうして倒れたのか、どこで倒れたの

かすらも。
「なんだか……迷惑かけちゃった感じ？」
「そんな、気に為さらなくて結構ですよ？」
いやでも、やっぱりそこは気にかかる。
「でもさ、なんかお礼の一つぐらい出来ないと申し訳が立たないというか」
「お礼、ですか？」
「そうそう。出来ることも限られてるし、もしかしたら必要ないかもしれないけど……」
ましてや、お嬢様なんだし。
「いえ、そんなお気持ちはとても嬉しいです。そうですね……」
考えるようにして、黙り込む白石。次の言葉を俺も待つ。
一分ぐらい経った辺りで、何かを閃いたみたいだった。
けれど、すこし躊躇う様子から、まだ少し考えているみたいにも見える。
「どう、何か思い付いた？」
「えっと、まあ……思い付いたといえば、そうなんですけど……」
「何でも言ってくれよ。俺に出来ることだったら、どんなことでもいいから」
そうしないと気が済まないし。
「分かりました。じゃあ……お願いします」
そこまで言って、一度息を大きく白石は吸い込んだ。
「私と一緒に……暮らしてください」
全くの予想外の一言だった。

白石家（前書き）

最近まで、小説本文は４０００文字までだと思ってました……
桁が一つ間違ってます、恥ずかしい

次話から、一話一話長くなります

白石家

「はい？」
意味が分からない。
「二回目を言うのは……それなりに抵抗があるのですが……」
「いや……そこは大丈夫、うん。しっかり聞き取ってる」
それに、同居は出来ないわけじゃない。けど
「どうして、それがお礼に？」
「それは……必要だからです。そう、必要だから！」
「え？　必要って、どうして？」
今度は、理由がよく分からない。
「何でも、してくれるんですよね？」
「確かに、そうは言ったけどさ……」
「じゃあ、問題ないですよね？」
さっきから勢いが凄い。身を乗り出して来てて、顔も近づいてきてるし。
「で、でもさ、ほら！　君の家族とかは、大丈夫なわけ？」
「母と父は、共に多忙の身ですから、帰ってくることは、ほとんどありません。帰ってきてもほんの少しの間だけですし。それと、姉が居ますが、ここ五年は帰ってきていませんし」
「ああ……うん。そっか。君さえ大丈夫なら、いいのか……」
「そうです。何も問題はありませんよ？」
正直、この話は割りと魅了的だ。
親とか部屋の広さとか、間違いなく俺の家より、いい環境だと思う。
けれど、どうしても抵抗がある。
今日初対面で、名前もさっき知ったばかりの男女が、同じ屋根の下で……？

「あの……やっぱり迷惑でしたか？」
不安そうに、蚊が鳴くような声で聞かれたら
「い、いや！　何も問題ないさ！　よ、よろしくな！」
こう答えるしかなかった。
「え……は、はい！　よろしくお願いしますね」
けど、嬉しそうな白石を見ていたら、これもいいかなって思えてしまった。
「とりあえず、もう大分遅いですし、寝ませんか？」
「あ、ああ。わかった。その……おやすみ」
「ええ。おやすみなさい」
そう言って、照れを隠すように微笑んだ白石は、そりゃあもう可愛かった。
けど、俺はこのときに、もっと多くのことを聞くべきだった。
聞いていても、どうしようもなかったのかも知れない。
そうだとしても俺は、忘れてはならないことを忘れていた。

＊＊＊

「ええ。おやすみなさい」
自然と、口から漏れるように出たこの言葉。
でも、なんだか言ってから、恥ずかしくなって笑って誤魔化す。
そのまま、上気した気分で廊下に出る。
その瞬間に思い出す。
自分の体が、背負っている負担のことを。
一之瀬さんと話すのは、楽しい時間だった。それも、今終わった。
楽しい時間は過ぎるのが、早い。それから楽しければ、辛いことも忘れられる、というのも本当のことだったみたいだ。
体の外から意識を押しつぶすような、重たい重圧を感じる。
それと同時に体の内から燃えるような、痛みが湧き出てくる。
体を休めて、重圧を緩和させれば楽だろう。けど、痛みがそれを

許さない。
傷を治して、痛みを癒せば楽だろう。けど、重圧がそれを許さない。
ただ、じっと時が来るのを、待つしかない。
私が背負った、十字架が消える時を。
しかし、その時が来れば、きっと私はこの世に存在しないだろう。
これは、私が選んだ道。
今更変えるつもりはないし、変えられもしない。
全ては、愛する人の為。
愛は惜しみなく与う、とてもいい言葉だと思う。
私は、ほとんど体を引きずるようにして、自室に戻った。
部屋に入ったら、そのまま行儀も何もかもを、無視してベッドに横になる。
どうせ、誰も見ていないから関係ない。
そのまま、何分、何時間と時が過ぎるのを待つ。
窓から見えた満月は、いつまでも美しく輝いていた。

＊＊＊

どんな時でも、時間は過ぎる。つまり、明けない夜はないということで。
そんな感じで、今は朝だ。
昨日、というか正確に言えば、今日の最後の白石の顔が忘れられなくて、あまり寝られていない。目を覚ました時間が時間だから、あまり寝る必要がないといえば、そうなんだけど。
とりあえず、体を起こしてベッドから出る。そのまま、廊下に出て、とりあえずリビングに……って、そういえばリビング何処にあるか知らない。
どうしようか……。分からないからといって、部屋に居続けるのも、ちょっとなぁ……。

「あら、お早いですね。一之瀬さん」
丁寧な言葉遣いに、おだやかな声。
「あ、葉月さん。おはようございます」
「おはようございます」
なんというか、タイミング良いなこの人。夜の時のいい、今といい。
「ちょうどよかった。今、リビングが何処にあるかわからなくて、困ってたんですよ」
「あら、そうでしたか。では、私に着いて来てください。ご案内させていただきます」
「ありがとうございます。なんか、申し訳ないです。お仕事の途中だったんじゃ？」
「いえいえ。今丁度、朝食を作ろうと思っていたのですよ」
うーん……流石、大人の女性。さり気なく、こちらをフォローしてくれている。
「では、どうぞ。こちらに」
葉月さんに着いて、赤い床の廊下を歩く。夜は暗かったせいか、絵を良く見れてなかったけれど、絵にはそれぞれどこかでみたことのあるような、不思議な紋章が書かれていた。
「それにしても一之瀬さんは、朝本当に早いんですね」
「え、だって今日学校じゃないですか。いくら環境に慣れてなくても、ちゃんと起きていきますよ」
「なるほど……一之瀬さん、今日は昭和の日。祝日で学校はおやすみですよ？」
「え……あ、そっか……。うわあああ、なんか勿体無い！」
休みの日なら、もっとゆっくりしたら良かった……。昨日の日付をすっかり、忘れていた。
「そんな経験、私も学生時代に何回か経験しましたよ」
くすくすと嫌味無く、小さく葉月さんが笑う。
「いや、でもうん。一応人の家だし、うん。ダラダラしちゃいけませんよね」

「そうですね。前向きなのは、いいと思いますよ」
昨日は、休みだって分かってたはずなんだけどな……。どうして忘れてたんだ？
「さ、着きましたよ」
着いたらしいから、考えるのはやめる。忘れた理由なんて、物を忘れることから比べたらどうでもいいし。
「あ、ありがとうございます」
例によって、ドアは葉月さんが開けてくれる。分かっていても、なんとなく違和感を覚えてしまう。
例によったのは、葉月さんだけではなく、リビングの広さもまたそうだった。
広いけれど閑散とした感じはなく、かといって家具なんかに圧迫されてもいない、バランスのいい所だった。
「分かってはいますが、やっぱり俺の家とは格が違いますね」
「部屋の良さは、一概には広さや快適さでは決められないんですよ。まあ、それがあるに越したことはないんですけどね」
大人の意見。経験の差って重要だなぁ……。
「まだ、俺にはよく分からないです。見た目なんかの、上辺の物に惑わされがちです」
「それが分かっているだけでも十分ですし、他のことなら一之瀬さんにも、お分かりになれる思いますよ」
「他のこと……ですか？」
うーん……。為になりそうな話ではあるんだけど……。
「そのうち……分かりますよ。とりあえず、私は朝食の準備をしますね」
一旦話は終わりらしい。
「あ、それなら俺も手伝いますよ。上手い訳じゃないですが、何もしないのもアレですし」
「朝食なので簡単なものしか作りませんし、結構ですよ」
「いや、でも……」

「一之瀬さんは、真面目ですね。それなら、一つ頼まれてくださいますか？」
「なんでもやりますよ！」
同じことを白石に言って、凄いことになったけど、多分……大丈夫だろう。
「お嬢様を、起こしに行って下さいませんか？」
「お嬢様って……白石のことですよね？」
分かってはいるんだけど……勝手に、女の子の部屋に入るのは……。
「ええ、そうですよ？」
ですよねー。
「分かりました。起こしに行ってきます」
リビングから出ようと、扉に手を掛けたところで思い出した。
「白石の部屋って……どこですか？」
手を掛けたまま、葉月さんに首だけ向けて聞く。
「あっ……すっかり忘れていました。出る前に、気づいて下さってよかったです」
忘れることは、誰にでもあるから仕方ない。けど、なんとなく葉月さんが忘れるのは、珍しいことな気がした。
いや、まあまだ知り合って間もないけど。メイドさんって、完璧な人ってイメージ……あったから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7685s/

俺の彼女は存在しない。

2011年5月11日19時55分発行